

名古屋学院大学

～ 学生一人ひとりに密着した自学自習システムの運用 ～

名古屋学院大学では、定期試験の結果に限らず、小テストへの取り組みなどを含めて総合的に成績評価できる e - ラーニングシステムを構築している。個々の学生の学習記録を管理することで、学習進度に応じた指導が可能となり、また、出席やレポート提出の督促など、学生に密着した教育指導を行っている。

1. e - ラーニングの実施目的：

- ・ネットワークを介した学生との質疑応答などインタラクティブ性を確保するため
- ・小テストなどによる学習履歴の把握や学習進度に応じた課題提示など自学自習支援のため

2. e - ラーニングの実施規模

- 実施の規模 全学的に実施
- e - ラーニングを活用する科目数 . . . 7 科目
- 対象となる学生数 約 4,000 人

3. 授業での位置付け

21世紀の新たなキャンパスのあり方として、IT（情報技術）と融合したキャンパスを創造し、キャンパスコミュニケーションシステム（以下、CCS）を構築した。このシステムは「必要な時」に「必要な人」が「必要な場所」で「必要な情報」を取り出すことのできるネットワークシステムであり、学生・教員・事務局間での対面教育・対面指導に加え、ネットワークを用いた教育・学習指導を実現している。

この CCS をベースシステムとして、そのもとに教育支援システムと 5 択式問題を出題する自学自習システムがある。これらのシステムは、対面で行われる授業での利用を前提とし、その授業における学生の事前・事後学習をネットワークを用いて支援するものである。本学で開講しているすべての科目に教育支援システムの機能が利用できる科目のポータル



ページ（科目情報ページ）を提供し、このページを介して学生からの質問に答えるなど、教育・学習指導を行っている。

科目情報ページには、出席カード、電子アナライザー、小テストなどの授業を支援する機能のほか、事前・事後学習としても利用できる授業アンケート、レポート提出、教材配布、電子講義板（科目内 B B S）、フリーフォルダなどの機能がある。これらの機能と自学自習システムを併用することで、授業の効率を向上させ、より質の高い教育を行うことができる。

授業を受講する上で必要な基礎知識は、自学自習システムで学生に繰り返し問題を解かせて習得させている。そして、授業で小テストを実施し、学生に緊張感を与えるとともに、基礎知識の習得レベルを確認している。自学自習システムを利用する教育上の狙いとしては、主として基礎知識の確立であり、すなわち繰り返しが必要とされる学習項目は、出題、採点、学習記録などをコンピュータで管理し、そのデータから一人ひとりの能力や学習態度に基づいた個別学習指導を実践するところにある。

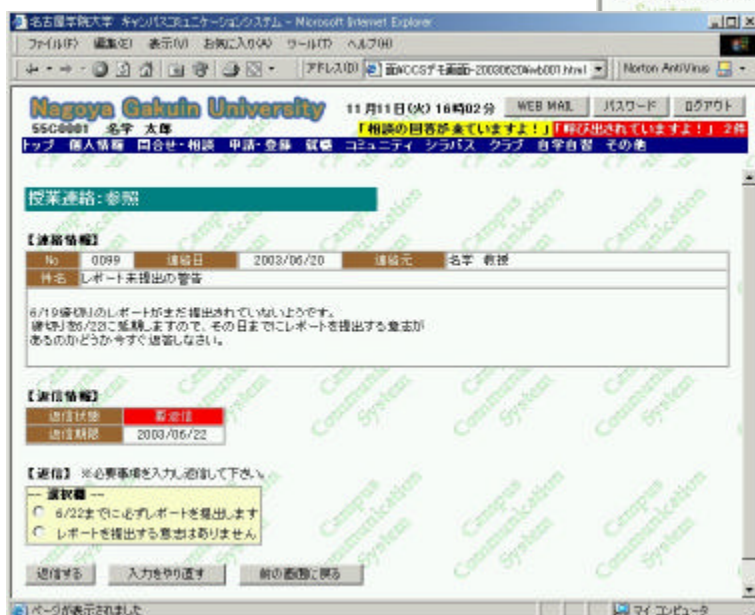
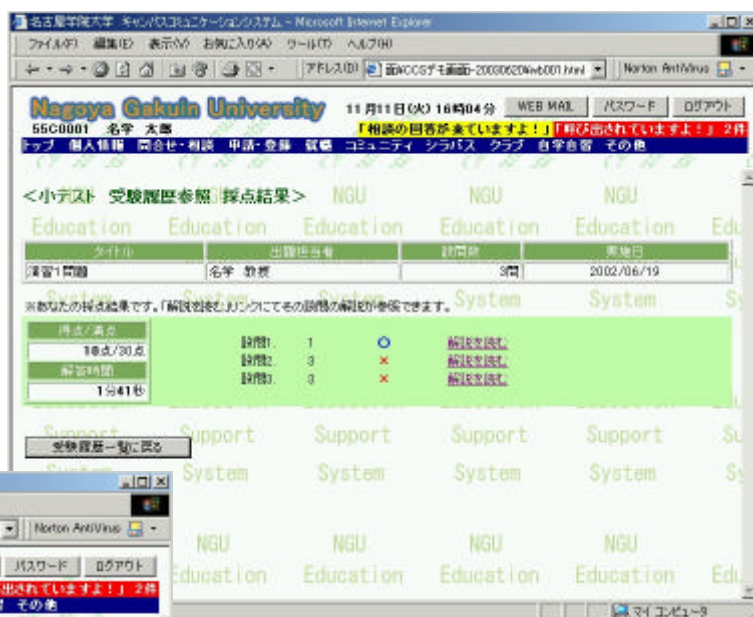
その他、動画・音声などのマルチメディア教材を学生に教材配布機能で提供し、その教材をもとにレポート課題を与え、レポート提出機能もしくはフリーフォルダ機能を用いて回収している。とりわけ、フリーフォルダ機能による回収では、授業前に受講生が他の受講生のレポートを読むことができることから、実際の授業では有意義かつ活発なディスカッションが行える。

これらのシステムを活用して蓄えた学習履歴（自学自習システムにおける解答問題数、解答時間、正答率やレポート提出状況など）は、成績評価の参考にしている。

4．代表的な授業科目での活用内容

- (1) 科目名 『情報処理入門』
- (2) 受講学生数 1,000人
- (3) 具体的な活用状況

当該科目は、40以上の少人数クラスでパソコン実習を行う。総合的な情報システムの C C S を授業に取り込み、特に、教育支援システムや自学自習システムなどを活



用して、効率的な授業運営を実現している。

パソコンの操作だけでなく、必要な基礎知識を身に付けるため自学自習に单元ごとの練習問題を用意し、解答させている。また、C C S では、この練習問題から小テストを実施できる。各クラスで複数回の確認テストを実施し、その結果は自動的に C C S の個人の学習記録へ登録できるので、紙媒体で実施していた時と比べ大きな改善となっている。これ

らの学習データや出席状況・レポート提出状況などをCCSではトータルに表示できるので、学生一人ひとりの成績評価が極めて多面的かつ公平に実施できるようになった。

5 . e - ラーニングの活用により期待している効果

通常、学習は学生一人ひとりの努力に任せているが、自学自習システムでは学習履歴が一覧できるので、学習指導において様々な利用法が展開できる。特に、学習時間、到達度、正答率などの項目でソートできるので、学習状況に即応した改善が可能となった。

出題する教員側として、正答率は問題の良し悪しを判断するのに役立つ。これらのデータに基づき、問題を更新することでより学生に適した問題集へと常に改編することができる。また、登録されている問題は、すべての教員に公開している。問題が他の教員に見られていることを意識するため、これが授業のさらなる質の向上に繋がる。

学生側では、問題のカテゴリーごとに成績上位ランキングが表示される。ランダムで出題される5択式の練習問題であり、何度も解答することにより成績は上がってゆくの、学生にとっては「ゲーム感覚」で実施できる。これらの機能から学習意欲が向上している。また、ある程度の割合でこれらの練習問題が、小テストに出題されるので学習意欲の向上に繋がっている。



6 . 大学の支援内容

本システムでは、教員による学生の自学自習支援を円滑に行うことができるよう工夫されている他、問題の作成・更新や学習履歴の管理に関しては、各教員が自主的に行うようになっており、実際、数名の教員がこれらを活用している。

情報教育センターでは、より多くの教員にシステムを活用してもらえよう操作方法に関して個別相談に応じている。しかし、どのような場面においてシステムを利用すると教育効果が得られるのかまでは説明できていない。今後は、講習会や発表会などを催し、システムの活用事例をもとに教育効果を示すことが必要となる。

7 . 今後の方針、拡大・改善の計画

教育支援システムおよび自学自習システムは、改善を行っているが、利用する教員側にとって未だ不便なところも少なくない。本格的に利用されはじめ、さらに利便性を高めることが必要である。あわせて、マルチメディア教材を充実させ、CCSの積極的な活用を推進することで、名古屋学院大学のe - ラーニングが実現してゆくものと考えている。

《問い合わせ先》

名古屋学院大学 情報教育センター 主任 高橋 公生 氏
TEL:0561-42-0863